

Title	Samuel Beckett 論 : Happy Days 考
Author(s)	白川, 計子
Citation	Osaka Literary Review. 17 P.83-P.92
Issue Date	1978-12-25
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25675">https://doi.org/10.18910/25675</a>
DOI	10.18910/25675
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# Samuel Beckett 論

— *Happy Days* 考 —

白川 計子

I'm working with impotence, ignorance. My little exploration is that whole zone of being that has always been set aside by artists as something unusable—as something by definition incompatible with art. I think anyone nowadays, who pays the slightest attention to his own experience finds it the experience of a non-knower, a no-can-er.<sup>1)</sup>

この Samuel Beckett の言葉は、彼の芸術についての二つの重要な点を明らかにしている。一つは、彼の常に変らぬ主題であり、いま一つは、彼の芸術の本質的な困難さである。

Beckett の全ての作品は、人間存在の究極的な reality を扱っている。生の目的や意味を知り得ず、世界の無秩序、混沌の中で、全く無能である non-knower, no-can-er としての人間の根本的な真実が、彼の中心的な主題である。彼の全ての作品に通じるこのような主題は、そもそも芸術ではなく観念の世界、つまり哲学の領域に属してきたものである。そして当然のことながら、多くの批評家達が、彼の作品の様々な部分から哲学的意味を引き出し、既存の哲学思想との類似を指適したり、あるいはそれをあてはめて作品理解の助けとしてきている。Descartes, Schopenhauer, Heidegger, Sartre, Nietzsche, Pythagoras, Geulincx, Leibniz, Wittgenstein 等々。哲学思想を Beckett の作品にたどる批評は跡をたたない。しかし、上記の引用にあるように、現代に生きる我々が、自分自身の経験にほんの少しでも注意を払うならば、だれしも non-knower, no-can-er としての経験をしているのに気付くはず、と Beckett が言う時、彼は、深遠なる哲学知識よりも、むしろ、我々が生活の中で漠然と感じて

いる共通の経験を、漠然とした形のままで具現せしめようとしていると思えてならない。我々は Beckett の芝居を見る時、毎日の生活の中でほとんど忘れ去っているかもしれないが、確かに知覚しているある感じを再び体験する、つまり、言葉や意味ではなく、心の奥底に潜んでいる漠然とした感覚を、強く呼び覚まされるのである。

本論では、*Waiting for Godot*, *Endgame* に次ぐ長編劇として1961年に書かれた戯曲、*Happy Days* をとおして、Beckettの芝居がどのようにそういった体験をひきおこすように仕組みられているかを見ていきたい。

*Happy Days* は、二幕からなり、二人の役者によって演じられる。主人公 Winnie は五十才前後のまだ容色の衰えていない婦人であり、六十才ぐらいの夫 Willie と共に暮している。甚だしく異常なのは、この劇の Setting である。舞台中央に低い円丘があり、その中心に Winnie が埋もれている。一幕では、腰のところまで埋もれていて、二幕では首まで埋もれている。彼女の夫 Willie は円丘の後ろにいて、観客にはほとんど見えず、時たま禿頭と毛むくじらの手が見えるだけである。彼らは、他の Beckett の主人公達がほとんどそうであるように、mobility をうばわれている。Winnie はもちろん腰から上だけしか動かせないし（二幕では首も回らず、動かせるのは顔の造作だけである）Willie はなんとか四つんばいになって動ける程度である。彼らが縛りつけられているこの世界は、常に強烈な光に照らされており、一面焼け草の抜がる不毛な荒地のごときである。そしてここには朝も夜も無く、誰も通らず、何も起こらない。我々がこの劇をとおして、実際に見聞きするのは、主人公 Winnie の円丘の上での限られた行為と、ほとんど独白にちかい彼女のおしゃべりである。卜書によれば、Winnie は “Well-preserved, plump, big-bosom, and blonde (for preference)” であり、胸の広く開いた服に、真珠のネックレスまでしている。この Winnie の容姿は、彼女が今埋もれている不毛の円丘と甚だしいコントラストをなしている。この Setting と登場人物のコントラストは、この劇全体に通じる重要な仕組である。円丘に徐々に沈みつつある Winnie

は、それにもかかわらず、豊満で陽気である。彼女の悲惨な悲劇的状况は、幕開きと同時に、観客に一目瞭然であり、そしてまた、彼女の陽気な、むしろ喜劇的な外貌も同時にあきらかである。そして Winnie の語るあらゆる台詞の中に、我々は、ほとんど悲劇的な言葉を聞くことはない。恐怖も不安も絶望も、Winnie は訴えることはなく、この劇のほとんどを占めているのは、彼女の表面的で、空虚なおしゃべりである。

Beckett はこの劇においてはじめて、言葉を状況から切り離すことに成功している。つまり、決して究極的真実を握み得ない、むしろ真実を知るための妨害にしかなり得ない無能な媒体である言葉を、言葉の本来のちりのごとき無価値な状態へと戻しているのである。Happy Days 以前に書かれた二つの長編劇、Waiting for Godot と Endgame を見るならば、ここでは、登場人物の状況を伝えるのは彼らの言葉であった。Waiting for Godot においては、二人の浮浪者の喜劇的なやりとりは、彼らの救い難い状況を示す言葉が散りばめられていたし、Endgame においては、劇全体が、支離滅裂で矛盾に満ちた形ではあるが、悲劇的な言葉に満ち満ちていた。しかし、この Happy Days では、登場人物の状況は、完全に視覚化されている。言葉が状況を説明することはない。

Waiting for Godot の決して知り得ぬ謎は、二人の浮浪者が待ちつづけている Godot その人であり、Endgame においては、四人の登場人物のいる部屋の外部が謎であった。(登場人物の一人、Clov がその部屋から外へ出て行くかどうか、ちょうど Waiting for Godot において、Godot が来るか来ないかのような function になっている。) Waiting for Godot においても、Endgame においても、Godot が何であるか、部屋の外が何であるかは、登場人物の言葉から察せられるものであり、もちろん、登場人物自身が、non-knower, no-can-er であるので、彼らの台詞のどこを探しても、その実体は明らかになりえないのである。しかし、Happy Days ではその謎が、つまりはその謎の function が視覚化されている。その function とは、登場人物を閉じこめていること、そして、時の流れが

彼らを死に到らしめるまで永遠に謎のままに彼らを包んでいることである。*Waiting for Godot* では、二人の浮浪者は Godot のために永久にその場をはなれられない。そして謎である Godot その人は永久に現われまいだろうという事も明らかである。そして *Endgame* では、Clov は何度も部屋を出て行くと言いながら、その実行が不可能なのが明らかであり、(出て行くことは死を意味するのだ) 出て行かないかぎり、部屋の外は謎のままなのである。*Happy Days* の場合、Winnie にとっての謎は、この円丘の世界であり、それは彼女を閉じ込めており、彼女はこの謎から逃れることができないまま死んでいくのである。三つの劇に共通するこの謎は、まさに我々にとって知ることの出来ないマヤのベールの向う側であり、登場人物達は皆自分の居る世界の謎に覚醒しつつ、様々な形でその中で生きつづけている non-knower, no-can-er である。

Beckett は *Happy Days* で、円丘というきわめて視覚的で、しかもすべての彼の劇が要する function を行使しうる Setting を用いたことによって、彼が、今まで頼らざるをえなかった言葉の意味から、少なからず抜け出すことができたわけである。*Happy Days* において、Beckett は、現存の芸術である演劇を、もっとも巧みに利用し得たと言えるかもしれない。

この円丘を、過ぎゆく時間だとか、Winnie がしがみついている過去だとか、彼女が日々埋もれている習慣だとか、様々な解釈することは、可能ではあるが、それは Godot が誰かを説明しようとするのと同じように無意味なことである。重要なことは、その円丘に特定の意味を与えるのではなく、それが言葉や知識では知り得ない不合理、謎であり、Winnie は、そこに拘禁されたまま、目覚め、眠り、また目覚めて生き続けなければならないということである。

では、Winnie は、この円丘の上で、いったいどのような形で生きつづけるのであろうか。

Winnie の台詞と行為は、ちょうど彼女の外見がそうであるように、残酷な円丘とは相入れないものである。彼女の一日はベルの音で始まり、ベ

ルの音で終る。ベルの正体もまた不明であり、誰が鳴らすのかどこから聞こえるのかは分らない。ただ彼女にとってベルの音は絶対であり、彼女は従わざるをえない。ベルは円丘と同じ不可思議な力で彼女を拘束しているのだ。幕が開くと Winnie は円丘の上で眠っている。けたたましいベルの音が鳴り響き、彼女は目覚め、そして最初の台詞を言う “Another heavenly day” と。そしていとも普通に朝の祈りをして、“Begin Winnie (Pause) Begin your day!” と自分に励ますように言っかけてくる。そして彼女は、劇中で、“Oh this is going to be another happy day”, “That I found so wonderful” と繰り返し言いつづけるのである。Winnie がいかに円丘を無視して彼女の一日を “happy day” に創りあげるかを、少し詳しく調べてみよう。

彼女は円丘上の手の届くところに、色々な物の入った袋を持っていて、そこから次々に日常的な物を取り出しては、いとも日常的な生活をしつづけるのである。歯をみがき、口紅を塗り、眼鏡をかけ、薬を飲み、帽子をかぶり、爪に鑢をかけ、といった具合に。そして、その間のとりとめもないおしゃべりと仕草は、観客を笑いの渦にまきこむ。そして Winnie はどんなに些細なことにも幸福を見出す。

WINNIE takes up toothbrush and examines handle through glass.

WINNIE Fully guaranteed... (WILLIE stops fanning)... genuine pure... (Pause. WILLIE resumes fanning. WINNIE looks closer, reads.) Fully guaranteed... (. . . polishes spectacles, puts on spectacles, looks for glass, takes up and polishes glass, lays down glass, looks for brush, takes up brush and wipes handle, . . . and examines handle through glass.) Fully guaranteed... (WILLIE stops fanning)... genuine pure... (pause, WILLIE resumes fanning)... hog's (WILLIE stops fanning, pause)... setae. (Pause. WINNIE lays down glass and brush, paper disappears, WINNIE takes off spectacles, lays

them down, gazes front.) Hog's setae. (Pause.) *That is what I find so wonderful, that not a day goes by— (smile) — to speak in the old style — (smile off) hardly a day, without some addition to one's knowledge however trifling, the addition I mean, provided one takes the pains.*<sup>2)</sup> (イタリック——筆者)

Winnie は歯ぶらしの柄の文字を眼鏡をふきふき漸く知ることが出来る、「豚毛」と。そして日々どんな小さなことでも知識を得ることは素晴らしいと喜ぶのである。

彼女が幸福を感じることの中から、最大の幸福の源は、夫の Willie である。彼はめったにしゃべらないし、たとえ口をきいたにしても、彼の言葉は極端に短い。にもかかわらず Winnie は絶えず彼に語りかけ、そして返事を期待する。彼が返事をしてくれた時には、Winnie はまったく幸福である。

WINNIE What would you say, Willie, speaking of your hair, them or it? (Pause.) The hair on your head, I mean. (Pause. Turning a little further.) The hair on your head, Willie, what would you say speaking of the hair on your head, them or it?

Long pause.

WILLIE It.

WINNIE (turning back front, joyful). *Oh you are going to talk to me today, this is going to be a happy day!* (Pause. Joy off.) *Another happy day.*<sup>3)</sup> (イタリック——筆者)

そして、たとえ彼女のささやかな希望が叶えられなかった時でさえ、彼女の言葉は幸福な考えへと導かれる。

WINNIE . . . Was I lovable once, Willie? (Pause.) Was I ever lovable? (Pause.) Do not misunderstand my question, I am not asking you if you loved me, we know all about

that, I am asking you if you found me lovable -- at one stage. (Pause.) No? (Pause.) You can't? (Pause.) Well I admit it is a teaser. And you have done more than your bit already, for the time being, just lie back now and relax, I shall not trouble you again unless I am compelled to, just to know you are there within hearing and conceivably on the semi-alert is ... er... *paradise enow.* (Pause.)<sup>4)</sup> (イタリック — 筆者)

Willie がたとえ答えてくれなくとも、半分注意して聞いてくれるのが分かれば、天国同然というわけである。

こんな風に彼女は決して絶望的な言葉を口にしない。彼女のロジックは正しく彼女を言葉の上の幸福へと導く。しかしながら、これは彼女が自分の真の状況に気付いていないからではない。もし彼女が自分の真の状況を認識していないとすれば、この劇は、薄っぺらなアイロニーの芝居以上のものではなくなる。もし彼女が単に愚かな、楽天的な女性にすぎないとしたら、観客はただ彼女を嘲笑し、彼女の生活に見られるアイロニーを楽しむだけである。だが彼女は自分の状況に気付いている。そしてさらに自分がすべきことをも知っているのだ。

WINNIE . . . Ah yes, so little to say, so little to do, and the fear so great, certain days, of finding oneself... left, with hours still to run, before the bell for sleep, and nothing more to say, nothing more to do, that the days go by, certain days go by, quite by, the bell goes, and little or nothing said, little or nothing done. (Raising parasol.) *That is the danger.* (Turning front.) *To be guarded against.*<sup>5)</sup> (イタリック — 筆者)

彼女は自分自身を危険から守らねばならない。その危険とは、言うこともすることも全て失くしてしまつて、彼女の“happy day”をそれ以上創り出すことが出来なくなることである。その時、現実から目をそらす全ての気散じが無くなり、ひたすら絶望だけを直視し続けなければならない恐ろしい時が彼女を襲うであろう。しかし、こうして彼女が言うことやするこ



とを持っているかぎり、彼女は自分の一日々々を“happy days”にしつづけ得るのである。たとえ彼女のできることがほんの僅かであっても、それに比例して、彼女の望みもつつましいものになる、つまり、彼女が能力を奪い取られればそれだけ彼女の欲望も小さなものになっていくのである。こうして、自分の希望が満足させられ彼女は自分の日々を幸福にたもつことができるのである。

彼女は、又、自分のこの奇妙な世界に完全に慣れきっている。何が起ろうとも彼女は決して驚くことはない。そして、決してそのわけを知りたがったりせず、ただそれを受け入れるだけである。しかも感謝しつつ。“．．． Strange? No, here all is strange. Thankful for it in any case. Most thankful” 一幕で観客は、非常に印象的な場面に出くわす。Winnie がさしていた日傘が突然燃えだすのだ。

WINNIE . . . . .  
 (Maximum pause. The parasol goes on fire. Smoke, flames if feasible. She sniffs, looks up, throws parasol to her right behind mound, cranes back to watch it burning. Pause.) Ah earth you old extinguisher. (Back front.) I presume this has occurred before, though I cannot recall it. . . . .  
 . . . . .  
 Yes, something seems to have occurred, something has seemed to occur, and nothing has occurred, nothing at all, you are quite right, Willie. (Pause.) The sunshade will be there again tomorrow, beside me on this mound, to help me through the day.<sup>6)</sup>

この事件は観客を驚かせ、Winnie の世界の不可思議の印象を強めるのだが、同時に、この事件が Winnie には全く影響を及ぼさないのがわかる。彼女は、これは前にも起ったことがあると言って、日常的な次元で受けとめるのである。

二幕での Winnie は一幕よりはるかに悲惨な状態にいる。彼女の不可思議な世界は彼女を情容赦なく扱い、彼女は首だけを円丘からつき出した状

態で、もはや、袋の中の日用品を使って“happy day”をつくることはできない。彼女は、最後に残された言葉をつかつて物語りをしたり、過去の記憶をたどったりする。そして相変らずほほえみを浮かべ、“That is what I find so wonderful.” “Great mercies, great mercies.” と言いつづけるのである。

この劇の最後の場面は、深い感動を与えるにちがいない。Willieが円丘を這って回ってきて Winnie の目の前に現われるのである。それは、一幕で Winnie がとても叶わない願望として夢みたことであつた。そして大変な努力で円丘に這い登ろうとした Willie は Winnie に向つてよびかけるのである。

WILLIE (just audible). *Win.*

Pause. WINNIE's eyes front. Happy expression appears, grows.

WINNIE *Win!* (Pause.) Oh this is a happy day, this will have been another happy day! (Pause.) After all. (Pause.) So far.

Pause. She hums tentatively beginning of song, then sings softly, musical-box tune.

Though I say not  
 What I may not  
 Let you hear,  
 Yet the swaying  
 Dance is saying,  
 Love me dear!  
 Every touch of fingers  
 Tells me what I know,  
 Say for you,  
 It's true, it's true,  
 You love me so!

Pause. Happy expression off. She closes her eyes. Bell rings loudly. She turns her eyes, smiling, to WILLIE, still on his hands and knees looking up at her. Smile off. They look at each other. Long pause.

CURTAIN <sup>7)</sup> (イタリック — 筆者)

Willie は Winnie のことを Win と呼ぶ。これは、明らかに「勝利」との pun である。自分を取りまく苦境に対して屈せず自己の存在を守り、“happy days”を失わなかった Winnie に対してこの呼びかけはふさわしいものであろう。老いたカップルは見つめ合い love song を歌って、まるで喜劇の happy ending のパロディのごとき終局である。

以上見てきたように、Winnie の言葉やふるまいは、その異常な環境にもかかわらず、常に日常の生活を離れない。彼女は、自分をとりまいている、そして閉じ込めているこの奇妙な世界が何であるか、そして何故自分がこの世界に置かれているのか、決してたずねることはない。ただ彼女はひたすら自分の生活を幸福なものへと創りあげようとしている。彼女が自分に対してしているこの一種の芝居は、ベケットの他の登場人物達が皆、多かれ少なかれしている事である。ただこの劇の際立った相異は、観客にとって彼女の陥っている現実の姿が、終始ショッキングな形で視覚にうったえられている事である。観客は円丘に閉じ込められている Winnie の姿に、いつしか自分達自身のこの世における存在のあり方を重ねて見てしまうだろう。そして、その円丘の上で、円丘を無視するかのよう、幸福の芝居をする Winnie の言葉に、大いに笑いながらも、Winnie の宿命を、そして人間の宿命を心の奥底で感じつづけるにちがいない。その時、Winnie の姿は、円丘の世界は、我々の漠然とした non-knower, no-can-er としての感覚を呼び覚ます、見事な象徴となり得ているのである。

## 注

- 1) Samuel Beckett, quoted in James Eliopoulos, *Samuel Beckett's Dramatic Language* (The Hague: Mouton & Co. N. V., 1975), p. 31.
- 2) Samuel Beckett, *Happy Days* (New York: Grove Press, Inc., 1976), pp. 17-18.
- 3) *Ibid.*, p. 23.
- 4) *Ibid.*, pp. 31-32.
- 5) *Ibid.*, p. 35.
- 6) *Ibid.*, pp. 37-39.
- 7) *Ibid.*, p. 64.